

## その 43

### 万葉ファンタジア

#### 『万世集から万葉集へ』

#### (その 3)



多賀城址(多賀城市)

左大臣橘諸兄の子橘奈良麻呂の乱を抑え込み、橘、大伴一派を一掃した藤原仲麻呂は、淳仁天皇を擁立、天皇から恵美押勝の名を賜り、名実ともに最高権力者となった。

ところが、病に倒れた孝謙上皇に取り入り力をつけた僧道鏡に危機感を抱いた仲麻呂は、かつての権勢を取り戻そうと平城京を出て兵を挙げるが、敗北。琵琶湖に舟を出して逃げようとするが捕らえられ妻子ともども斬首され、栄華を誇った藤原家は一気に滅亡する。まさに、歴史の皮肉である。

一方、奈良麻呂の乱には与しなかったが、そのとばっちりを受けて、大伴家持は、因幡守に左遷される。そして翌年の正月、新年を寿ぐ歌を詠み、それ以降歌を絶ち、「歌わぬ歌人」となる。

都に戻ってからも幾たびか謀反への関与を疑われ、再び薩摩守に左遷、大宰少弐に転ずるなど九州の地方官を務める。その後、異色の万葉学者大浜巖比古氏が『万葉幻視考』で勅撰説をと説いた光仁天皇の即位に伴い、21年ぶりに昇進して、色部太輔など要職を歴任、早良皇太子の春宮大夫とうぐうだいぶにもなり、その兼任のまま、延暦3(784)年、持節征東将軍に任ぜられる。

その間、「歌わぬ歌人」となった家持は密かに「万世集」の編纂を進めたのだろうか。

万葉ファンタジア「万世集から万葉集へ」、その3は、前回から20数年後の家持である。

言霊の精霊の語りで、さらに、万葉ファンタジアは続く。

春宮大夫兼務のまま、当時蝦夷の反乱で世情穏やかならぬ東北の陸奥按察使鎮守將軍みちのくあぜちに任命された家持さま。この頃桓武天皇は、弟の早良皇太子を廃して自分の皇子を皇太子にしようと目論んでいたため、早良皇太子の信任厚かった家持さまを皇太子から引き離すための任命だったのでは、とも言われています。当初は任地に赴かずその役目を担う、いわゆる



(言霊の精霊役)浪曲師玉川奈々福さん

遥任でしたが、翌年には中納言に昇任して鎮守将軍から持節征東将軍に昇格することになり、陸奥国多賀城に向かうことになります。

「大嬢、大嬢、今帰ったぞ」

「おかえりなさいませ。何やら慌ただしいご様子。何ごとかございましたか？」

「陸奥按察使鎮守将軍から持節征東将軍とするという命が下った。陸奥国への旅立ちの準備をせねばならぬ」

「と申されますと、陸奥国は多賀城にございますか？それはあまりにも……家持さまは、早良皇子をお世話する春宮大夫ではなかったのですか？」

「そうじゃ、春宮大夫は兼任のままじゃ」

「では、なにゆえにございますか？皇太子さまをお側でお世話する春宮大夫が、なにゆえに陸奥国に行かねばならないのですか？家持さまは、<sup>よわい</sup>年齢すでに67でございますよ。行かれてはなりません。陸奥国に行かれてはなりません！」

「そのようなわけにはいかぬ。任命の印として大君の節刀を授かるのじゃ。持節征東将軍になった以上、陸奥国に行かぬわけにはいかぬのじゃ」

「行かれてはなりません。陸奥国の冬はなんとも厳しいというではありませんか。その寒さは越中の比ではないと聞いております。行かれてはなりません。それに、大伴一族の駿河麻呂どのは、同じ陸奥按察使として数年前に多賀城で亡くなり、その後副将軍は蝦夷に殺されて多賀城は焼き払われたというではありませんか。行かれたら命なくなります。行かれてはなりません」

「確かに蝦夷討伐は極めて難事であるが、これが最後のお役目じゃ。それに、蝦夷も、武をもってお収めるのではなく、彼らと語り合えば、互に通ずることもあろう。分かってくれ」

「分かりませぬ。分かりたくありません。またあの歌を思い出しました」

「あの歌？」

「あなたさまが夢に出てきて、『死んでしまうよ』と、私に言うのです。陸奥国に行かれたら、それが正夢になりそうで怖いのです。行ってはなりません」

「思い出した……『<sup>いめ</sup>夢に見えつる』というお前の歌じゃな？『生きてあらば 見まくも知らず何しかも 死なむよ妹と 夢に見えつる』(巻四・五八一) ……

やはり、いい歌じゃ。そう言えば、因幡の国に向かうときじゃったな、お前がその歌のことを申したのは？」

「そうでございます」

「ならば、約束した通り、因幡国から、ホレ元気に帰って来たではないか」



(大伴家持)和泉元彌 (大嬢)下田麻美

「はい、確かに。うれしゅうございました。しかし、それから20数年、薩摩守から大宰府、その後は遥任とは申せ、相模守、上総守、伊勢守などなど……そして、陸奥国にございますよ。大和の国の遥か西から東までではありませんか。ましてや征東將軍とは、蝦夷の討伐がお役目なのではないのですか？それは、あまりでございませう」

「確かにお前には数々の心配をかけたものじゃ。それは申し訳なく思っておる」

「はい、心痛いたしました」

「しかし、お前も知っておろう。父上が征隼人持節大將軍として薩摩に出向き、隼人の反乱を鎮圧したことを。その後私が薩摩守となり、このたびは節刀を賜り陸奥国の蝦夷を鎮めねばならぬのじゃ。父上の後を追うが如きわが定めなのじゃ」

「……でも、あなたさまの身に何が起きるのか気がかりなのです」

「わしの方こそ、お前のことが心配じゃ。そなたにはこれまで言うに言われぬ苦勞をかけたのは存じておる。しかし、そなたも大伴家の代々のお役目は存じておるな」

「はい。大君を『お側で』お守りするのがお役目と承知しております……でも『お側で』でございますよ……それが、なにゆえに陸奥なのでございますか？」

「確かにそなたの言う通り『お側で』お守りするのがお役目じゃ。じゃが、このたび大君から直々に賜る節刀は大君の名代のごときもの。節刀を賜るのは、大君を『お側で』お守りするも同然なのじゃ。大君をお守りする武門の家である大伴の氏上として、誠にもって榮譽でありわが本望じゃ。これが最後の任となろうが、蝦夷討伐は極めて難事でもあり、この先何が起ころうとろたえてはならぬ。ところで、出立を前に、お前に申し伝えておかなければならないことが一つある」

「……うろたえてはならぬ、と申されましたが、まだ何かあるのでございますか？……またまた、外にお子でございますか？」

「ハッハッハ、戯れを申すでない。そなたも、わしの齡は 67 と申したではないか…子のことではなく、もっと大事な宝じゃ」

「お子よりもっと大事な宝があると申されるのですか？」

「しろがねもくがねも玉も何せむに、まさ優れる宝、子よりもっと優れる宝やもしれぬぞ。これじゃ……」



『万世集』<sup>よろずよしゅう</sup>じゃ。ここにある 20 巻の巻物じゃ。万世に語り伝える歌集『万世集』じゃ。これを、謀反の書として探し求めている輩もおる。今は何があったとしても表に出すことはまかりならぬ。これをお前に預けるから命に代えて守ってほしいのじゃ」

「『万世集』にございますか。このようなものを、いつまでお守りすればよろしいのです？」

「この『万世集』を末永くお守りし、国書として公にさせていただけるのは、今や早良皇太子さましかおらぬ。じやが、今皇太子さまは身動きとれぬ。かようなものがあれば、皇太子さまの身にさらに危険が及ぼう。そのためにも、皇太子さまが即位されるまでは、何があっても隠し通さねばならぬのじゃ」

「皇太子さまが大君になられるまで？」

「そうじゃ。人の生命ははかない。現世<sup>うつしよ</sup>はほんのひとときにしか過ぎない。人生は、現世にしばし咲く『時の花』じゃが、歌は万世に生きる『永遠<sup>とわ</sup>の花』なのじゃ。『万世集』は、万世に生き、万世に伝えるのじゃ」

「『万世集』は、『永遠の花』にございますか……」

「そうじゃ。そこで、これをお前に託するにあたり、この『万世集』を謀議の書として探し求めている輩がいるので、その眼を眩ますためにも、『万世集』の名を変えることにしようと思っておる」

「名前を変える？ なんと名前にございますか？」

「かつて橘諸兄さまは『万歳無窮<sup>ばんせい</sup>、千葉相伝<sup>せんよう</sup>』……つまり、『万歳千葉』と申されておられた。そこで、それをさらに詰めて……『万葉<sup>まんよう</sup>』……『万葉に伝える歌集』……『万葉集』じゃ。その義は同じじゃが、呼び方を変えて、人の目を欺きたいのじゃ。中国の五経の内の一『詩経』には次のようにある。『葉世也』、つまり、『葉は世なり』じゃ」

「『葉は世なり』にございますか？」

「そうじゃ。それに、この『葉』の字をよく見てみよ。何か見えぬか？」

「『葉』<sup>は</sup>という字にしか見えませぬが、何か？」

「草冠と木の間には、何かないかのう？」

「草と木の間？ ……ああ、ありました、『世』がありました」

「そうじゃろうが。『万葉集』は、そのまま『万世集』なのじゃ」

「『万葉集』は、『万世集』なのでございますね」

「さらにじゃ、『葉』には、もう一つ他の義があるじゃろう？」

「もう一つ他の義ですか？ ……やはり、木の葉の『葉』という字しか思い当たりませんが……」

「木の葉だけではなからうが……『言の葉』じゃ。『万葉集』は、『万の言の葉』を集めた歌集なのじゃ」

「やっと分かりました。『万葉集』には、『万世』と『万の言の葉』という二つの義が込められていると申されるのですね」

「そう。『万葉集』は、『万世に伝える万の言の葉の歌集』なのじゃ。雄略天皇に始まり聖徳太子さまのお歌、額田王、人麻呂さま、赤人さま、憶良どの、そして父旅人、われらが母坂上郎女らが、ホレそこにいるかのよう



こうして、家持さまは、春宮大夫兼務のまま持節征東将軍として、陸奥多賀城に旅立たれました。

それから2年後の延暦4（785）年8月の夜のこと、家持さまは一人病の床に伏せ夢にうなされていきました。その夢には、異界に逝った人や家持さまを取り巻く多くの人々が出没いたしました。

「コウ、コウ、コウ……<sup>たまよぼ</sup>魂呼ひの音が聞こえる……呼ぶな……<sup>おみなめ</sup>妾か、ナデシコの花は咲かなくなった……書持こそ、こちらへ来い……池主、早まるな……仲麻呂どの、まだ鞭打たれるか……藤原の一族めが、無念じゃ……君側の奸藤原種継、桓武天皇を操りおって……大君、何卒……継人、種継を殺めよ、種継を射よ。いや、駄目じゃ、射るな……早良皇太子、耐えられよ……大嬢、そなたが見えぬ……大嬢、『万世集』を……いや『万葉集』を……早良皇太子、『万葉集』を……コウ、コウ、コウ、もう呼ぶな……シタ、シタ、シタ、寒い……何も見えない……ここはどこじゃ……」

家持さまを多賀城にお送りした際の妻大嬢の不安が早くも的中し、「夢に見えつる」と詠んだ歌の通りになったのです。

8月28日、こうして家持さまは多賀城にて波乱に満ちた68歳の生涯を閉じたのです。家持さまの遺体は火葬に付され、遺骨となって奈良への帰路につくことになります。

それからおよそ1カ月後、またまた事件が起きます。家持さまの最期の夢に出た桓武天皇や種継、早良皇太子さまや継人などが、この事件に関わってきます。

時の桓武天皇の行幸に際して、造営中の長岡京に早良皇太子と中納言藤原種継が残りました。そして9月22日の夜、種継は松明をかかげて建設中の工事を視察している途中、何者かに矢を射かけられ重傷を負います。そして、翌朝息を引き取りました。第一の寵臣の急を聞いて急いで立ち戻った天皇は、首謀者として家持さまの従兄大伴古麻呂の子、大伴継人とその弟竹良ら数十人を捕えて取り調べ、獄につないだのです。そして、厳しい取り調べに、継人らは「家持が大伴一族らに種継を排除すべしと呼びかけ、早良皇太子に申し上げてから決行した」というのです。その後継人らは斬首や流刑等厳しい処罰を受けることになります。

家持が唯一人頼りにしていた早良皇太子の運命は？そして、「万世集」、いや、「万葉集」の運命や、いかに？

（続く）